

重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴

——信頼感およびアイデンティティとの関連——

永田 彰子* 岡本 祐子**

本研究は、ライフサイクルを通じた重要な他者との関係において構築された関係性の各様態の特徴について明らかにするために、信頼感およびアイデンティティとの関連について検討することを目的とした。成人中期から後期の男女 206 名を対象に、関係性様態、信頼感、アイデンティティを尋ねる質問紙調査を実施した。その結果、関係性様態と信頼感との関連において、関係性発達の構成概念である、重要な他者との関係における葛藤や危機を通して主体的位置づけが重要な要素であることが示された。信頼感が主体的位置づけを行う際の模索の重要なエネルギー源であると推察された。さらに関係性様態とアイデンティティとの関連において、関係性発達の構成概念である主体的位置づけが重要な要素であることが示された。関係性発達のもう一つの構成概念であるコミットメントの普遍化で関連が見られなかったことについて、アイデンティティ研究のコミットメントと対他者の文脈でのコミットメントは質が異なることが推察された。また、関係性様態とアイデンティティ・ステータスとの関連においては、一部で関連性が見出された。

キーワード：関係性様態、アイデンティティ、重要な他者、信頼感、アイデンティティ・ステータス

問題と目的

今日、家族や社会を取り巻くさまざまな状況が急速に変化する中、他者との関係の持つ意味が改めて問い直されている。近年、関係性の視点から人格発達を捉え直そうとする試みが注目されるようになったことは、このような社会的問題意識の高揚と深いつながりを持つ。他者との関係の中でどのように人が発達していくのかの方向性を提示していくことは現代社会において意義あることである。特に成人期を対象とした研究では、子どもの巣立ちや両親、配偶者の老いや死など、対象との関係の捉え方の変化や危機的事態の中で的人格発達について、近年、重要な示唆が得られている(例えば、永田・岡本, 2005; 宇都宮, 2004; 渡邊・岡本, 2005, 2006)。

ところで、他者との関係にはさまざまな文脈が考えられるが、特に重要な他者との関係は人間生活の生物学的、情緒的な側面において個人に与える影響が大きく重要である(永田, 2004)。重要な他者との関係は身近であるが故に、必然的にポジティブ・ネガティブな関係を経験することになる。そのような関係が自分自身のあり方の発達において重要な意味を持つとの認識を、

成人期の発達研究として提案することは有効と考えられる。

永田・岡本(2005)は、関係性を重要な他者との関係を通して構築される他者との関係の中での個人のあり方と定義し、成人中期から後期における重要な他者との関係の中で構築される関係性の発達を提案している。この研究では、重要な他者とのポジティブ・ネガティブな関係の中で自己自身のあり方(関係性)が再体制化されることを関係性の発達と捉えている。具体的には、重要な他者との関係においての葛藤や危機を経験し、その危機を通して重要な他者との関係やそこで起こる事象を自分自身において意味あることとして主体的に位置づけるとともに、重要な他者との関係で経験したことが他の人間関係一般にも反映されるというコミットメントの普遍化が起こることを関係性発達としている。これらの2つの概念の組み合わせにより関係性発達のレベルはI再体制化完了型、II現状満足型、III否認・軽視型に類型化される。以下、これを関係性様態と記す。

ところで、類型化されたそれぞれの関係性様態には、どのような特徴が見られるのだろうか。

まず、本研究では重要な他者との関係にかかわる感情に関連すると考えられる信頼感に着目し、各様態の特徴を調べることにより、関係性様態間の差異を明らかにする。

* 就実短期大学幼児教育学科
anagata@shujitsu.ac.jp

** 広島大学大学院教育学研究科
yokamoto@hiroshima-u.ac.jp

天貝 (1997) は人が生涯に渡って取り組んでいく課題の一つとして信頼感をあげ、信頼感を「自分あるいは他人 (他の対象) に対して抱く信頼できるという気持ち」と定義し、その一連の研究で青年期から老年期まで視野に入れた信頼感の生涯発達について検討している (天貝, 1995, 1997, 1999)。

天貝は一連の研究の結果により、信頼感を把握する際に 1. 対自的側面 (自分への信頼)、2. 対他的側面 (他人への信頼)、3. 否定的側面 (不信) の 3 側面から捉えることの有効性を示唆し、また自分への信頼が主に青年期・成人期前期を頂点として変化がみられなくなるのに対し、他人への信頼と不信は各々がより多義的になりつつ成人期以降も増加を示すことを明らかにしている。天貝の指標は、信頼感を 3 側面の組み合わせから検討することにより、単なる量的変化にとどまらず、生涯発達における信頼感の質的变化をも検討することができることから、本研究の関係性発達との関連を検討する指標として有効であると考えられる。そこで、天貝 (1995, 1997) の信頼感尺度を用いて、信頼感と関係性様態との関連を明らかにすることを第 1 の目的とする。

ところで、永田・岡本 (2005) は中西・佐方 (1993) の心理社会的段階目録検査を用いて、関係性発達とアイデンティティ発達との関連について検討を行った。その結果、関係性発達と Erikson の提示した心理・社会的発達課題である信頼性、アイデンティティ、世代性²、総得点との関連が示された。

加藤 (1986) によると、アイデンティティの概念化には、アイデンティティ次元アプローチとアイデンティティ・ステイタスアプローチの 2 つの様式があるとされている。「前者はアイデンティティを“混乱”から“成立”に至る 1 次元的連続体とみなすアプローチであり」、「後者はアイデンティティの状態を規定する心理社会的要因の組み合わせによって、質的に異なるいくつかのアイデンティティ・ステイタスを定義するアプローチである」(加藤, 1986)。永田・岡本 (2005) が関係性発達との関連で使用した心理社会的段階目録検査は前者のアプローチであり、関係性発達とアイデンティティ発達との関連が示されたものの、その関連は 1 次元的な得点の高低であり、質的な違いについては明らかにされていない。これを検討するには後者のアイデ

ンティティ・ステイタスアプローチが有効であると思われる。つまり、意思決定までの主体的な模索期間である危機 (crisis) を経験したかどうかと、選択された対象へ自己投入 (commitment) しているかどうかによってアイデンティティを捉えるアイデンティティ・ステイタス (Marcia, 1966) はアイデンティティの発達過程を段階的に理解するのに有効である。そこで、本研究では、「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」の得点の組み合わせからアイデンティティを捉える加藤 (1983) のアイデンティティ・ステイタスの判定尺度を使用することにより、関係性様態とアイデンティティ発達との関連を明らかにすることを第 2 の目的とする。

尚、本研究では対象者の発達段階として、成人中期から後期に焦点を当てる。この時期は、子どもの巣立ち、両親の老いや死、配偶者ともう一度向き合ってから後半生の計画を立てるなど (杉村, 1999, p.74)、重要な他者との関係が大きく変化する時期であり、関係性発達を明らかにするには適した発達段階であると考えられるからである。

方 法

1. 調査対象者および実施時期

東京都、兵庫県、岡山県、広島県、福岡県、熊本県在住の 40 歳代から 60 歳代の男女を対象に質問紙調査を実施した。750 部配布し、356 部回収 (回収率 47.5%)、そのうち無記名部分の多いもの (154 部) を除いた 206 部 (有効回答率 27.5%) を分析対象とした。対象者は、男性 57 名、女性 149 名、平均年齢 57.4 歳であった。調査は 2005 年 2 月～3 月に行った。

2. 質問紙調査内容

(1)基本属性 (年齢、性別、結婚および就労の有無) (2)信頼感尺度 (天貝, 1995, 1997) 18 項目。対人的信頼感を多次元的に測定するための尺度で、「自分への信頼」「他人への信頼」「不信」の 3 側面から測定する。(3)アイデンティティ・ステイタスの判定尺度³ (加藤, 1983) 12 項目。「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」のそれぞれの合計得点の高中低の組み合わせにより、アイデンティティ達成、A-F 中間、権威受容、積極的モラトリアム、D-M 中間、アイデンティティ拡散の 6 タイプに分類される。(4)ライフサイクルを通じた重要な他者との関係の中で構築された関係性として、「自己への主体的位置づけ」と「コミットメントの普遍化」について尋ねる SCT 14 項目 (永田, 2002; 永田・岡本, 2005)。

¹ 各様態の概念構成については永田・岡本 (2005) に詳しく説明されているので、参照されたい。

² 中西・佐方 (1993) では生殖性と訳されている。generativity の訳語を生殖性とするか世代性とするかについては議論が分かれるところである。本研究は世代性と訳す立場を取る。

Table 1 関係性様態の概念構成と人数分布

	関係性様態								
	I 再体制化完了型			II 現状満足型			否認型	軽視型	
	I-1	I-2	I-3	II-1	II-2	II-3	III-1	III-2	
葛藤	有り	無し	未解決	有り	無し	未解決	有り	無し	
主体的位置づけ	有り	有り	有り	有り	有り	模索中	無し	無し	
コミットメントの普遍化	有り	有り	有り	無し	無し	無し	無し	無し	
男性	2	4	0	14	8	3	3	23	
女性	24	14	0	26	28	6	9	42	
合計	26	18	0	40	36	9	12	65	

3. 反応の評定

関係性に関する SCT 14 項目に対する反応について、永田 (2002)、永田・岡本 (2005) により見出された視点である「自己への主体的位置づけの有無」と「コミットメントの普遍化の有無」の2つの視点に基づいて分析を行った。反応内容には、重要な他者との関係において葛藤を記述している場合と、葛藤を記述していない場合とがみられた。従って最終的には、上記の2つの視点に加えて葛藤の有無ごとの評定を行った。ランダムに選んだ141名分のデータ(全体の70%)を2名の評定者(1名は筆者;もう1名は大学院学生で、5名分のデータでトレーニングを受けている)が独立に評定して調べた。評定者間の一致率は、82.1%であった。

結 果

1. 関係性様態の評定

関係性様態は、スコアリングマニュアル(永田,2002;永田・岡本,2005)に基づき、葛藤の有無、主体的位置づけの有無とコミットメントの普遍化の有無の組み合わせから8様態に分類された(Table 1)。セルの人数が極端に少ないものがあったため、再体制化完了型 I-1, I-2, I-3, 現状満足型 II-1, II-2, II-3 のそれぞれ3つのタイプ、否認型 III-1, 軽視型 III-2 の2つのタイプを一つの様態としてまとめ分析を行うこととした。I 再体制化完了型が44名、II 現状満足型が85名、III 否認・軽視型が77名であった。

2. 関係性様態と基本属性

結婚の有無ごとに関係性様態の人数分布を比較する

³ 加藤(1983)の分類に従うと、D-M 中間群が全体の半数を占める結果となる(佐藤,2001,p.98)との問題点も指摘されているが、危機と自己投入の組み合わせがアイデンティティの形成過程の説得力あるモデルとなっており、アイデンティティ概念の多様な理解とより質的な検討を可能にしている(加藤,1986)点で有効であると考え、使用することとした。

本尺度を成人期で使用することの有効性は清水(2004)に示されている。

ために、Fisher の正確確率検定を行ったところ、有意な偏りは認められなかった。また、就労の有無ごとに関係性様態の人数分布を比較するために、Fisher の正確確率検定を行ったところ、有意な偏りは認められなかった。男女別に関係性様態の人数分布を比較するために、Fisher の正確確率検定を行ったところ、性別の偏りは有意であり($p < .05$)、残差分析の結果、I 再体制化完了型において男性が少なく(2.9%)、女性が多かった(18.4%)。年齢について40代、50代、60代で関係性様態の人数分布をみたところ、年代の偏りは有意ではなかった($\chi^2(4, N=202)=5.845, n.s.$)。

3. 信頼感と基本属性

男女別に信頼感下位尺度の平均値を検討したところ、有意差は認められなかった。次に年齢別に信頼感下位尺度の平均値を検討したところ、「自分への信頼」得点($F(2, 199)=7.58, p < .01$)に年齢の主効果が認められた。各年齢について Tukey 法による多重比較を行った結果、「自分への信頼」得点は50代が40代よりも有意に高い得点を、60代が40代よりも有意に高い得点を示した。

4. 関係性様態と信頼感との関連

3において信頼感下位尺度の「自分への信頼」得点の項目に年齢の主効果が認められたため、年齢の影響を考慮に入れるために、年齢を共変量とした一要因分散分析を行った。「不信」得点、「他人への信頼」得点については一要因分散分析を行った。その結果、「不信」得点($F(2,201)=4.42, p < .05$)、「他人への信頼」得点($F(2,201)=9.60, p < .001$)に関係性様態の主効果が認められた。各様態について Tukey 法による多重比較を行った結果を Table 2 に示した。「他人への信頼」において、I 再体制化完了型がIII否認・軽視型より、II 現状満足型がIII否認・軽視型より有意に高い得点を示した。「不信」において、III否認・軽視型がI 再体制化完了型より有意に高い得点を示した。「自分への信頼」においては、様態の効果は有意ではなかった。

「他人への信頼」について、I 再体制化完了型がIII否認・軽視型に比べて有意に得点が高いという結果と、「不信」についてIII否認・軽視型がI 再体制化完了型に比べて有意に得点が高いという結果から、重要な他者との相互作用の中で自分自身のあり方が問い直されるといふ主体的位置づけと、対象へのコミットメントが自分にとっての重要な他者にとどまらず他者一般に普遍化されるコミットメントの普遍化の2点が、「不信」、「他人への信頼」得点の高さと関連していることが示された。さらに「他人への信頼」においてII現状満足型がIII否認・軽視型よりも有意に高い得点を示したことから、特に主体的位置づけが信頼感との関連において重要な要素であることが示唆された。

5. アイデンティティ・ステータスの尺度の信頼性検討

アイデンティティ・ステータスの尺度の信頼性を確認するためにCronbachの α 係数を算出した。その結果、 α 係数は、「過去の危機」で.63、「現在の自己投入」で.73、「将来の自己投入の希求」で.72であった。

6. アイデンティティ・ステータスの尺度と基本属性

男女別にアイデンティティ・ステータスの下位尺度の平均値を検討したところ、有意差は認められなかった。次に年齢別にアイデンティティ・ステータス判定の下位尺度の平均値を検討したところ、「現在の自己投入」($F(2, 200)=4.01, p<.05$)と「過去の危機」($F(2, 200)=5.93, p<.01$)に年齢の主効果が認められた。各年齢についてTukey法による多重比較を行った結果、「現在の自己投入」は60代が40代よりも有意に高い得点を、「過去の危機」は60代が40代よりも有意に高い得点を示した。

7. 関係性様態とアイデンティティ・ステータスの尺度の関連

5においてアイデンティティ・ステータスの尺度の「過去の危機」「現在の自己投入」に年齢の主効果が認められたため、年齢の影響を考慮に入れるために、年

齢を共変量とした一要因共分散分析を行った。「将来の自己投入への希求」については一要因分散分析を行った。その結果、「過去の危機」($F(2, 201)=5.06, p<.01$)、「現在の自己投入」($F(2, 201)=5.74, p<.01$)、「将来の自己投入の希求」($F(2, 201)=5.74, p<.01$)に關係性様態の主効果が認められた。各様態についてTukey法による多重比較を行った結果をTable 3に示した。「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」の全てで、I 再体制化完了型がIII否認・軽視型より有意に高い得点を示した。「過去の危機」と「将来の自己投入の希求」においてII現状満足型がIII否認・軽視型より有意に高い得点を示した。「現在の自己投入」においてはII現状満足型がIII否認・軽視型より有意に高い得点傾向を示した。

以上の結果から、「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入」の全てにおいて、I 再体制化完了型はIII否認・軽視型に比べて有意に得点が高いという結果から、重要な他者との相互作用の中で自分自身のあり方が問い直されるといふ主体的位置づけと、対象へのコミットメントが自分にとっての重要な他者にとどまらず他者一般に普遍化されるコミットメントの普遍化の2点が、「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入」得点の高さと関連していることが示された。さらに「過去の危機」と「将来の自己投入の希求」において、II現状満足型がIII否認・軽視型より有意に得点が高いことから、特に主体的位置づけが得点の高さと関連していることが示された。

8. アイデンティティ・ステータスの人数分布

アイデンティティ・ステータスの尺度における3変数の得点を基に、加藤(1983)の手続きに従って各ステータスに分類した。分類されたステータスについて、男女および年齢による出現頻度をFisherの正確確率検定により検討したところ、有意な偏りは認められなかった。

Table 2 共分散分析および分散分析による關係性様態別信頼感得点の推定値および平均値

	I 再体制化 完了型 (n=44)	II 現状 満足型 (n=84)	III 否認・ 軽視型 (n=74)	F 値	多重比較
「不信」得点	14.90	16.19	17.44	4.42	I < III*
「自分への信頼」得点	17.26	17.02	16.53	1.66	n.s.
「他人への信頼」得点	17.50	16.90	15.63	9.60	I > III*** II > III**

欠損値=4, *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

「自分への信頼」得点については共分散分析による推定値、それ以外は分散分析による平均値を示している。

Table 3 共分散分析および分散分析による関係性様態別アイデンティティ・ステータスの判定の下位尺度得点の推定値および平均値

	I 再体制化 完了型 (n=44)	II 現状 満足型 (n=84)	III 否認・ 軽視型 (n=74)	F 値	多重比較
「過去の危機」得点	15.95	15.66	14.20	5.06	I > III* II > III*
「現在の自己投入」得点	18.67	17.60	16.23	5.74	I > III** II > III*
「将来の自己投入の希求」得点	16.90	16.21	14.95	5.74	I > III** II > III*

欠損値=4, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .1$

「過去の危機」得点と「現在の自己投入」得点については共分散分析による推定値, 「将来の自己投入の希求」得点については分散分析による平均値を示している。

9. 関係性様態とアイデンティティ・ステータスの関連

関係性様態別にアイデンティティ・ステータスの人数分布の比較をするために, Fisher の正確確率検定を行った (Table 4)。その結果, アイデンティティ・ステータスに有意な偏りが認められた ($p < .05$)。残差分析の結果, 「アイデンティティ達成」と「権威受容」には再体制化完了型 (6.2%, 8.3%) が多く, 「アイデンティティ拡散」には否認・軽視型 (7.6%) が多かった。

考 察

1. 関係性様態と基本属性

関係性様態について男女の人数分布は, I 再体制化完了型で男性が少なく (3.0%), 女性が多かった (18.4%)。この結果は, 女性の方が概して他者との関係に深く関与し, 他者との関係をいかに構築していくかについての志向性が強いとする先行研究の見解と一致する。(例えば, Chodorow, 1978; 伊藤, 1993; Markus & Cross, 1990)。

重要な他者との関係におけるポジティブな事象, ネガティブな事象をどのように自分自身の人生に主体的に位置づけるかということと, 主体的位置づけの作業の結果, コミットメントの普遍化の意識を持つかどうかにかに男女差が認められたことには, 伝統的性役割観が関連していることが考えられる。現在成人中期から後期を生きる対象者は高度経済成長の中で伝統的な性役割分業に価値意識を見出しながら時代を生きてきたと思われる。特に男性の場合, 戦後, 「男は仕事」と自分自身を縛ってきた (伊藤, 2003, p.55)。このような時代的価値観が浸透していたことで, 男性においては他者とのかかわりについて意味を見出す作業は相対的に軽んじられてきたことから, 結果として I 再体制化完了型で男性が少なかったと考えられる。一方で, 家庭を中心に生活することが要請される傾向にあった女性の場合, 他者とのかかわりの中で必然的にポジティブ・ネガティブ相反する 2 つの側面を経験せざるを得ず, そのような関係の中での自己自身のあり方 (関係性) が問

Table 4 アイデンティティ・ステータスと関係性様態の類型パターン

	I 再体制化完了型	関係性様態	
		II 現状満足型	III 否認・軽視型
アイデンティティ達成 (n=18)	9 (6.2%) 2.273*	6 (4.1%) -0.174	3 (2.1%) -1.929
A-F 中間 (n=25)	5 (3.4%) -0.932	13 (9.0%) 1.936	7 (4.8%) -1.050
権威受容 (n=28)	12 (8.3%) 2.012*	8 (5.5%) -0.814	8 (5.5%) -1.056
積極的モラトリアム (n=3)	1 (0.7%) 0.225	1 (0.7%) -0.067	1 (0.7%) -0.141
D-M 中間 (n=54)	11 (7.6%) -1.497	19 (13.1%) 0.002	24 (16.6%) 1.382
アイデンティティ拡散 (n=17)	2 (1.4%) -1.553	4 (2.8%) -1.070	11 (7.6%) 2.493*

注: 上段: 人数, () 内は%。下段: 残差。* $p < .05$

われ模索することが相対的に多かったことが推測される。加えて、主体的位置づけの作業の展開には、他者との関係の中で自分自身の作業の内容を言語化することが重要な要素であると考えられる。しかし、男性の場合には、他者との関係について対人関係の中で言語化すること自体が、上述した社会文化的価値観により抑制されていたことも影響していると推察される。性役割分業などの考え方が、男性をも呪縛し、発達の可能性をかえって狭めてきたとも言われている(原, 1991; 柏木, 1993)。他者との関係が女性だけに重視されるテーマではなく、男女双方の人格発達において重要との認識が浸透するにつれ(杉村, 1995)、人数分布の性差は徐々に変わってくるかもしれない。

関係性様態と結婚および就労の有無に何らかの関連があるかについて検討を行ったところ、関連は認められなかった。関係性の再体制化の文脈には夫婦関係の文脈、親子関係(定位家族・生殖家族)の文脈、社会的対人関係の文脈の3者があり、どの文脈で関係性の再体制化が生じたかどうかではなく、いずれかの文脈で関係性の再体制化が生起することが重要である(永田・岡本, 2005)ことから、結婚の有無と関係性様態に関連がないという結果は納得のいくものである。就労形態については、関係性様態において上述の3者の文脈のうち、社会的対人関係だけが特別に文脈としての意味があるわけではなく、いずれの文脈も同等の重みを持つという裏付けが得られたと考えられる。

2. 関係性様態と信頼感

個人の心の中に自分や他人に対する信頼感が存在することは、重要な他者との関係の中での自己自身のあり方を探求する際の大きなサポート源になると仮定し検討を行った。その結果、「自分への信頼」以外の「不信」と「他人への信頼」においてI再体制化完了型とIII否認・軽視型との間に差異が認められ、「他人への信頼」ではII現状満足型とIII否認・軽視型との間に差異が認められた。

本研究の「自分への信頼」に有意差が認められなかった結果は、天貝(1997)の結果を支持するものである。天貝(1997)は成人期から老年期(30代から90代)に渡る信頼感の発達を検討した結果、「他人への信頼」と「不信」には年代差がみられ、各々増加していたが、「自分への信頼」は主に青年期・成人前期を頂点として変化がみられなくなっていた。本研究の「自分への信頼」で有意な関連が認められなかったことは、天貝(1997)が指摘するように「自分への信頼」は青年期から成人初期に安定したものとして確立されてしまうため、成

人中期以降での重要な他者の関係の中で主体的位置づけを行ったりコミットメントの普遍化が生じたりという関係性の発達からも影響を受けない、独立したものであると考えられる。

「不信」と「他人への信頼」において有意差が認められたことは、安定した信頼感を獲得していることと、重要な他者との関係の中で主体的位置づけの作業を行ったり、主体的位置づけの作業を行った結果その内容が他者一般に普遍化されることが関連していることを示している。「人とかかわるといことは私にとって」(SCT番号11)「喜び」であり、「いろいろな考え方があることを学び、人生でいい人達にめぐりあい感謝して」(主体的位置づけ有り)おり、「私は人に対して」(SCT番号14)「自分自身が感謝していることを他の人にも返していきたいと思う」(コミットメントの普遍化有り)という認識を持つ再体制化完了型の人、「人とかかわるといことは私にとって」(SCT番号11)「なければ寂しいし孤独を感じることもあるが、一人で何も考えなく自由にしたいと思う」(主体的位置づけ無し)、「私は人に対して」(SCT番号14)「正しくないと思うことがあると許せない時があり、非難してしまう」(コミットメントの普遍化無し)という認識を持つ否認型の人よりも、安定した信頼感を持っているのである。この結果より、信頼感が主体的位置づけの作業の展開に影響を与える、または主体的位置づけの作業により信頼感が高まることが考えられる。さらには主体的位置づけの作業を行うとき、(たとえ対象である重要な他者との間で信頼感を構築できないにしても、他の文脈で信頼感が保障されている場合も含めて)信頼できる他者に支えられたり支えたりという相互作用経験を有したかどうか重要な要素になってくることも考えられる。主体的位置づけの作業が信頼感という人間発達にとって重要な問題と関連を持つことは十分納得できる。

一方で本研究の結果でI再体制化完了型とII現状満足型との間に信頼感の差異が認められなかったことは、コミットメントの普遍化という関係性発達の第2の指標が信頼感との関連においては関連がないことを示している。これについては、以下のように考察できる。永田・岡本(2005)の関係性発達とアイデンティティ下位尺度との関連の検討で、「信頼性」⁴においてはI再体制化完了型>II現状満足型>III否認・軽視型の順で得点が高いという結果が得られ、主体的位置づけとコ

⁴ 天貝(1995, 1997)の信頼感と永田・岡本(2005)で使用した尺度の下位尺度である信頼性とを文章中で明確に区別する必要があるため、後者を「信頼性」と表記した。

ミットメントの普遍化の両者が「信頼性」の得点の高さに関連していることが示されている。このことから Erikson (1950) の漸成発達論の基本的信頼感と本研究で使用した信頼感 (天貝, 1997) との間には質的な差異が存在することが考えられる。天貝 (1997) の信頼感は、現在の感情に焦点を当てて信頼感を捉えるという立場をとる (天貝, 2001, p.28) が故に、幼児期への憧憬や母親・大人からの見捨てられ感などを表す基本的信頼に属する項目は削除されている。つまり、Erikson (1950) の漸成発達論の基本的信頼感は時間的連続性を持つ概念である一方で、本研究で使用した信頼感 (天貝, 1995) は現在の感情に焦点を当てたものであり現実の対人関係を反映した概念なのである。そして、本研究の関係性発達との関連で異なる結果が得られたことから、「コミットメントの普遍化」は現在の対人関係に反映されたものというよりも、より発達初期からの時間的連続性の要素を持つものであることが考えられる。

このことは次のような考察とも関連している。安定した信頼感をもつことは、人が他者をより支持的であると感じることにつながることや、対人的な親密性や適応感と関連することが明らかになっている (天貝, 2001 など)。実は、永田・岡本 (2005) の関係性発達と親密性得点との関連の分析から、本研究の結果と同様の、I 再体制化完了型、II 現状満足型の両者が III 否認・軽視型よりも親密性得点が高いという結果が得られている。I 再体制化完了型と II 現状満足型との間に親密性得点の差異が認められなかったことは、「主体的位置づけ」だけで十分に高い親密性を持つことができることを示しており、「コミットメントの普遍化」有りならばさらに高い親密性を持つということにはならないことを示している。これらの結果の解釈としては、コミットメントの普遍化は実際の現在の対人関係にコミットメントの結果として必ずしも反映される必要のない異なる次元の作業であることが考えられる。本研究で取り上げてきたコミットメントの普遍化は、実際の行動や適応の結果として表現されるものをさすのではなく、他者一般へのコミットメントの普遍化の意志の有無に焦点を当てている。このことが信頼感、親密性それぞれとの関連においては、コミットメントの普遍化が重要な要因でなかったことに起因していることが考えられる。

以上の本研究の信頼感との関連、永田・岡本 (2005) における「信頼性」、親密性と関係性発達との関連についての考察を踏まえると、関係性発達の第2の指標である「コミットメントの普遍化」概念の特徴について、

時間的連続性を持つものであるとの新たな示唆が得られたと考えられる。

3. 関係性様態とアイデンティティ

まず、関係性様態とアイデンティティの下位尺度である「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」との関連について考察する。全ての下位尺度において I 再体制化完了型と III 否認・軽視型との間と、II 現状満足型と III 否認・軽視型との間に有意差が認められた (「現在の自己投入」のみ有意傾向)。この結果は、過去に危機を経験し、現在高い水準の自己投入を行っている、または現在高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めているという発達したアイデンティティは、重要な他者との関係においての主体的位置づけの作業を行っていることと関連していることを示している。主体的位置づけとは、重要な他者とのポジティブ・ネガティブさまざまなかかわりを自己に与えられた意味あることとして位置づけているという内容を示している (永田・岡本, 2005)。つまり、自分にとって意義ある事項を積極的に試み、選択し、意思決定を行っている人は、重要な他者との関係で生じるネガティブ・ポジティブな事象が自分自身の人生において意義あることであると認識し、積極的に試み、選択、意思決定を行っていると考えられる。永田・岡本 (2005) によると、関係性再体制化プロセスの第1段階として重要な他者との関係における危機として認識する段階が示されており、I 再体制化完了型、II 現状満足型ともにこの第1段階は達成しているが、III 否認・軽視型は危機として認識しない、または危機を回避するという形でこの段階でとどまっていた。つまり、アイデンティティとの関連において I・II > III の結果が得られたことは、発達したアイデンティティと関係性発達は両者ともに危機が重要な要因になっていることを示していると考えられる。

次に、どの下位尺度においても I 再体制化完了型と II 現状満足型との間でアイデンティティとの関連が認められなかった結果について考察する。この結果は、I 再体制化完了型、II 現状満足型の両者が共に得点が高く、2つのタイプを弁別する関係性発達の第2の指標であるコミットメントの普遍化がアイデンティティとの関連においては、弁別力を持たないことを示している。この結果を生んだ要因として、対個人へのコミットメント、対他者へのコミットメントには内容の異質性が存在することが考えられる。現在もしくは将来の自己投入、つまりコミットメントは Marcia (1966, 1980) 以来、重要なアイデンティティ発達の指標とされてき

ており、永田・岡本 (2005) ではこの指標を重要な他者との関係に応用し、コミットメントの普遍化として関係性の指標に取り入れた。この研究では、岡本(1994)の中年期に崩壊あるいは動揺し、再び組み直されて安定した自己のあり方が形成されていくアイデンティティ再体制化の知見を他者との関係に応用し、関係性発達を関係性の再体制化という視点から捉えている。その結果、発達した関係性は再び組み直されるにとどまらず、さらに組み直されたものが他者へのコミットメントとして対人関係に普遍化されることが見出された。つまり、対人的文脈においては再体制化の内容が異なってくるのである。これについては、以下のことが考えられる。

「私は今、自分の目標をなしとげるために努力している」(現在の自己投入, 項目番号1) と「私は人に対して_____」(関係性 SCT 項目番号14) を比較した場合、前者の自己自身の生き方を模索するコミットメントと、後者の他者関係へのコミットメントは、コミットメントという意味においては同質であるが、後者の對他者へのコミットメントにおいてのみ、「私は人に対して(互いが理解し合える関係を築いていきたい)」との反応にあるように、さらに普遍化へと展開が見られた。成人中期は家庭や職場でさまざまな現実的束縛やプレッシャーを受けながらジェネラティブィティに対する関心を実現することは容易ではなく、そのために停滞感を募らせたり自己本位的態度に陥ったりする危険性を併せもっている(申崎, 2005)。重要な他者との関係においても同様のことが推測され、個人にとって望ましい関係を形成することが困難な場合、重要な他者との関係にコミットした結果、停滞感や諦めを募らせたり、また自己本位的態度に陥ることも少なくない。しかし一方で、重要な他者へのコミットメントを通して“放棄できない義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する”(Erikson, 1964/1971)からこそ、コミットメントだけでは留まらない普遍化へのさらなる展開があると考えられる。つまり、「コミットメントの普遍化」は関係性の領域においてのみ出現する独自の発達の概念である可能性を示している。

ところで、関係性発達と心理社会的発達課題の達成度との関連をみた永田・岡本 (2005) では、他者との関係が重要と考えられる項目(信頼性, アイデンティティ, 世代性, 統合性, 総得点)において関係性発達との関連が顕著にみられた。一方で、自己自身の生き方に焦点化したアイデンティティを捉える尺度を使用した本研究においては、「主体的位置づけ」の有無と「アイデンティ

ティ」の関連が示されたが、「主体的位置づけ」が達成された後の「コミットメントの普遍化」の有無との間では有意差が示されなかった。この両者の結果を合わせると、自己自身の生き方に焦点化したアイデンティティが発達している場合に、必ずしも他者との関係において十分に危機に取り組み、コミットメントを行っているとは言えないことが考えられる。このことは、他者との関係における危機やコミットメントを直接検討する必要があることを示している。

特に成人期においては、他者との関係はこれまでよりもはるかに複雑な関係となり、その中に埋め込まれながら後半生に向けて他者との関係の中での個人のあり方の問い直しが行われると考えられる。つまり、とりわけ他者とのかかわりが重要な要素になる成人期におけるアイデンティティの全体性を議論するためには、当然他者との関係における危機やコミットメントも直接取り上げて調べる必要があるのではないだろうか。この意味において、関係性そのものの発達を検討した本研究の意義は確認されたと言える。

次に、関係性様態とアイデンティティ・ステータスの関連について考察する。「過去に危機」を体験し「現在の自己投入」も高い「アイデンティティ達成型」はI再体制化完了型に多く(6.2%)、「過去に危機」をあまり経験していないが「現在の自己投入」は高い「権威受容型」もI再体制化完了型で多かった(8.3%)。一方で、「現在の自己投入」は低く「将来の自己投入の希求」も弱い「アイデンティティ拡散型」はIII否認・軽視型に多かった(7.6%)。

「権威受容型」がI再体制化完了型で多かったことについては、以下のように考察する。「権威受容型」とは加藤(1983)によると、過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者を表す。本研究では関係性様態を捉える際に、主体的位置づけの有無とコミットメントの普遍化の2つの基準に加えて葛藤の有無も考慮に入れて類型化を行った。つまり同じ再体制化完了型であっても、主体的位置づけ有り、コミットメントの普遍化有り、葛藤有りの再体制化完了型I-1と、主体的位置づけ有り、コミットメントの普遍化有り、葛藤無しの再体制化完了型I-2と、主体的位置づけ有り、コミットメントの普遍化有り、未解決の葛藤有りの再体制化完了型I-3の3タイプが存在する。しかし実際には各下位タイプの人数が少なかったため、3タイプをまとめて一つのタイプにして検討を行った。従って、このデータには過去に葛藤を経験しているものもしていないものも含まれているの

である。加藤(1983)の言う葛藤は自分自身の生き方を考える上での葛藤を意味し、本研究が捉える葛藤は重要な他者との関係において経験した葛藤のみに焦点を当てているため、同じ葛藤でもその内容は異なる。従って、「権威受容型」でI再体制化完了型が有意に人数が多かったことについて、葛藤の内容が異なっても対応した結果が得られたという解釈が可能なのかについては、下位タイプの類型化で検討を行った上で結論付ける必要がある。この点については今後の課題とした。

II現状満足型においてはアイデンティティ・ステイタスに有意な偏りは認められなかったことは、先述したアイデンティティとの関連でコミットメントの普遍化の指標の有効性が確認されなかったことと関連していることが起因していると考えられる。また、主体的位置づけは有り、コミットメントの普遍化は無しII現状満足型に対応すると予測される、「危機は経験しているが、自己投入は行っていないという特徴を持つ」ステイタスはアイデンティティ・ステイタスには存在しないことも一つの原因として考えられる。

このように課題はいくつか残されているものの、現状満足型以外の様態で関係性発達とアイデンティティ発達との間に有意な対応関係が見出されことから、両者の関連性が示された。

4. まとめと今後の課題

本研究では、各関係性様態の特徴について明らかにするために信頼感およびアイデンティティとの関連に着目し検討を行った。その結果、両者との関連において、関係性発達の第1の指標である主体的位置づけが重要な要素であることが示された。信頼感との関連においては、主体的位置づけの作業が信頼感という人間発達にとって重要な問題と関連を持つことが推察された。アイデンティティ発達との関連においては、主体的位置づけで有意な関連が見出された。つまり、自分にとって意義ある事項を積極的に試み、選択し、意思決定を行っている人は、重要な他者との関係で生じるネガティブ・ポジティブな事象に対して積極的に試み、選択、意思決定を行っており、自分自身の人生において意義あると「主体的に位置づけ」ていると考えられる。一方で、コミットメントの普遍化では関連が見出されなかった。その理由として、対自己のコミットメントと対他者のコミットメントは質が異なることが考えられた。つまり、コミットするという意味においては同質であるが、後者の場合、普遍化へとさらなる展開を呈するという意味において、「コミットメントの普

遍化」は関係性領域のみに見られる独自の発達的概念であると提案された。

関係性様態とアイデンティティ・ステイタスとの関連の検討の結果、現状満足型においては関連が認められなかったものの、再体制化完了型と否認・軽視型でアイデンティティ・ステイタスとの関連が認められた。つまり、一部で有意な対応関係が見出されたことより、両者の関連性が示された。

関係性発達の併存的妥当性の可能性が支持された。

本研究では、生涯発達の観点から他者との関係の中で的人格発達を捉える探索的研究として関係性様態を提案した。「主体的位置づけ」については一定の結論が見出されたものの、「コミットメントの普遍化」では課題が残る結果となった。特に「コミットメントの普遍化」の概念そのものについて今後検討を深めることは急務である。

例えば、「普遍化」への途中プロセスと考えられる「重要な他者へのコミットメント」についても、今後、第3の指標として直接検討に入れる必要があると思われる。つまり「重要な他者へのコミットメント」を取り入れることにより、再体制化完了型と現状満足型の違いを精緻に区別できる可能性がある。

このことは以下の検討も可能にする。つまり、他の発達段階において本研究の関係性がどの程度、有効であるのか否かの議論である。関係性の第1の基準である「主体的位置づけ」はMarciaの「危機」に対応したものであるため、青年期においても有効であると推測される。また、「重要な他者へのコミットメント」を新たに指標として入れることにより、青年期と成人期の違いも議論可能になることも考えられる。つまり、「コミットメントの普遍化」は成人期特有の指標である可能性が高いが、コミットメントそのものを問題にする場合、対象が青年期であっても成人期であっても検討が可能であると考えられるからである。青年期と比較した場合、発達段階特有の経験知故に起こる成人期のそれとの反応差異は予測されるが、生涯発達の観点から青年期から成人期への関係性発達プロセスを明らかにするという意味においては、青年期を対象とした研究も意義があろう。

また、関係性発達における退行の問題についても今後検討する必要がある。一度コミットメントが普遍化されれば、他の様態への退行は見られないのかどうかについての疑問が残る。今後は、防衛機制の観点から(例えばCramer, 1995; Valde, 1996)コミットメントの普遍化について検討し、「コミットメントの普遍化」概念の

特質を明らかにすることが求められる。

引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371. (Amagai, Y. (1995). The effect of trust on ego-identity of high school students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **43**, 364-371.)
- 天貝由美子 (1997). 成人期から老年期に渡る信頼感の発達—家族および友人からのサポート感の影響— 教育心理学研究, **45**, 79-86. (Amagai, Y. (1997). A study on the development of trust in adults and elderly individuals : Effects of supportive feelings by families and friends. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 79-86.)
- 天貝由美子 (1999). 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因 教育心理学研究, **47**, 229-238. (Amagai, Y. (1999). Main experiential factors affecting trust in regular high school students and delinquents. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **47**, 229-238.)
- 天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学 新曜社
- Chodorow, N. (1978). *The reproduction of mothering : Psychoanalysis and the sociology of gender*. Berkeley, CA : University of California Press.
- Cramer, P. (1995). Identity, narcissism, and defense mechanisms in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, **29**, 341-361.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York : W. W. Norton.
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility*. New York : W. W. Norton. (鑑 幹八郎 (訳) (1971). 洞察と責任 誠心書房)
- 原ひろ子 (1991). 次世代育成力—類としての課題— 原ひろ子・館かおる (編) 母性から次世代育成力へ—産み育てる社会のために— (pp. 305-330) 新曜社
- 伊藤公雄 (2003). 「男女共同参画」が問いかけるもの—現代日本社会とジェンダー・ポリティクス— インパクト出版会
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究, **41**, 293-301. (Ito, M. (1983). A study on the developmental process of individual orientedness and social orientedness. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **41**, 293-301.)
- 柏木恵子 (1993). 日本における母性・父性をめぐって—思想的歴史的背景と発達心理学の理論と研究— 柏木恵子 (編) 父親の発達心理学—父性の現在とその周辺— (pp. 61-125) 川島書店
- 加藤 厚 (1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, **31**, 292-302. (Kato, A. (1983). A study of identity statuses and their structure in university students. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **31**, 292-302.)
- 加藤 厚 (1986). 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, **56**, 357-360.
- 串崎幸代 (2005). E. H. Eriksonのジェネラティヴィティに関する基礎的研究—多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して— 心理臨床学研究, **23**, 197-208.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marcia, J. E. (1980). Identity in adolescence. In J. Adelson (Ed.), *Handbook of adolescent psychology* (pp. 159-187). New York : Wiley.
- Markus, H., & Cross, S. E. (1990). The international self. In L. Pervin (Ed.), *Handbook of personality : Theory and research* (pp. 576-608). New York : Guilford.
- 永田彰子 (2002). 関係性からみた生涯発達 岡本祐子 (編著) アイデンティティ生涯発達論の射程 (pp. 121-147) ミネルヴァ書房
- 永田彰子 (2004). 生涯発達の観点からみた重要な他者との関係に関する研究の動向と展望—発達初期の重要な他者との関係が後の発達に与える影響に着目して— 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部, **53**, 401-410.
- 永田彰子・岡本祐子 (2005). 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討 教育心理学研究, **53**, 331-343. (Nagata, A., & Okamoto, Y. (2005). Analysis of the development of relatedness, constructed through relationships with significant others. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 331-343.)
- 岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房

- 中西信男・佐方哲彦 (1993). EPSI 上里一郎 (編) 心理アセスメントハンドブック (pp. 419-431) 西村書店
- 佐藤有耕 (2001). 自我同一性の形成 山本真理子 (編) 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉— (pp. 65-108) サイエンス社
- 清水紀子 (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ 発達心理学研究, 15, 52-64. (Shimizu, N. (2004). Identity development of pre- and post-empty nest women. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 15, 52-64.)
- 杉村和美 (1995). ライフサイクル—男性と女性— 南 博文・やまだようこ (編) 老いることの意味—中年期・老年期— 講座生涯発達心理学 5 (pp. 117-152) 金子書房
- 杉村和美 (1999). 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子 (編著) 女性の生涯発達とアイデンティティ (pp. 55-86) 北大路書房
- 宇都宮 博 (2004). 高齢期の夫婦関係に関する発達心理学的研究 風間書房
- Valde, G, A. (1996). Identity closure : A fifth identity status. *Journal of Genetic Psychology*, 157, 245-254.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, 16, 247-256. (Watanabe, T., & Okamoto, Y. (2005). The relationship between personality development after bereavement and care experience. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, 16, 247-256.)
- 渡邊照美・岡本祐子 (2006). 身近な他者との死別を通して人格的発達 質的心理学研究, 5, 99-120. (Watanabe, T., & Okamoto, Y. (2006). Personality development after bereavement : based on interview investigation of those bereaved due to cancer. *Qualitative Research in Psychology*, 5, 99-120.)

謝 辞

調査にご協力いただいた対象者の皆さんに心よりお礼申し上げます。また、くらしき作陽大学の渡邊照美さんには、データの評定の際にご協力いただきましたこと感謝致します。

(2005.6.20 受稿, '07.12.10 受理)

Relatedness Constructed Through Relations With Significant Others : Trust and Identity

AKIKO NAGATA (DEPARTMENT OF PRESCHOOL EDUCATION AND CHILDCARE, SHUJITSU JUNIOR COLLEGE) AND YUKO OKAMOTO (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, HIROSHIMA UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2008, 56, 149—159

The purpose of the present research was to study the relationship of trust and identity, in order to clarify characteristics of some aspects of relatedness constructed through relations with significant others. Participants, between the ages of 40 and 60 ($N=57$ men, 149 women ; average age 57.4 years), completed a questionnaire. When the data were analyzed with regard to the relation between relatedness and trust, "making sense of a crisis in one's own life", one of the criteria utilized to evaluate relatedness, was a significant factor. The same factor was significant in the analysis of the relation between relatedness and identity. Another criterion for evaluating relatedness, "commitment at a generalized stage," was not significant. A relationship between aspects of relatedness and identity status was partly confirmed.

Key Words : types of relatedness, identity, significant others, trust identity status, adults